

中瀬 有紀



High Lineを散歩していて偶然出会ったJordan Bettenの絵画 — *The High Liners*, 2012. Acrylic on Corrugated Metal. High Line between 27th and 28th Street NYC

年始に日本へ帰国した際に交わした会話を思い返すと、比較的頻繁に話題に上がった主題は「アメリカは日本と何が違うか」でした。同じように、ニューヨークでも私が日本人という理由から「日本はアメリカと何が違うか」が多く話題に上がります。人間は比較をしてものを判断するので、他者との違いに興味があり敏感です。それでは、舞台照明デザインにかかわる日米の違いとは何でしょうか。

照明デザイナー (LD) が光を考える課程は、両者に大きな差がありません。その理由のひとつは太陽にあります。もちろん、地球上のどこにいるかによって体験する太陽の光に大きな差がありますが、人間は国籍や人種さらには時代を越えて、太陽の光という存在の認識を共有しています。従って脚本に「昼」とあるなら、LDは戯曲と劇作家とその背景の歴史、文化的な調査、登場人物とLD本人の感情の変化を踏まえて、特定の場面に最も適切な太陽光がどのように芝居にかかわってくるかを考えます。それはアメリカ人LDでも日本人LDでも同じことです。

しかし、国の歴史も国土面積も、人種も文化も異なる日本とアメリカは、それぞれ

異国での照明作業を 楽しむ秘訣

の地に定着している組織編成と労働形態が違います。舞台制作において、照明デザインにかかわる日本とアメリカの最大の違いは、舞台監督=ステージ・マネージャー(SM)の仕事です。もちろん、公演の規模によっても組織編成と労働形態は変わりますが、アメリカでは舞台制作における役割分担の基本的な様式として、SMが照明のきかけを出します。多くの現場で調光はメモリー卓が使用され、LDはテクニカル・リハーサルで役者・衣装・装置・音と共に明かりを作り、キューの変化に要するTIMEも含めて卓に記憶し、GOのタイミングをSMに伝えます。SMが照明の転換を含む舞台上で行われる全ての動きを管轄するので、各部署の意図がSMのコールによって合理的に一致し、舞台の一体感を生みます。

アメリカのLDとSMのかかわりは、日米の照明デザインの違いを生むひとつの要因と言えます。ただし、両者の違いは単純に「違う」であり、優越を判断する素材にはなり得ません。「違い」により葛藤が生じることが多々ありますが、葛藤を受け入れその「違い」を互いに尊重し楽しむことが、人間として存在する醍醐味だと思います。